

「ノーベル平和賞」

2015年10月13日

今年のノーベル平和賞は、チュニジアの民主化に取り組む民間4団体「国民対話カルテット」が受賞した。チュニジアは23年間、ベンアリ独裁政権が続いていた。2010年に、失業中の男性が許可なく青果を販売し、警察に摘発されたことに抗議して、焼身自殺をした。この事件をきっかけに、反政府運動が広がり、2011年にベンアリ政権が崩壊した。「ジャスミン革命」と呼ばれ、「アラブの春」の先駆けになった。イスラム政党が主導する暫定内閣が誕生したが、野党政治家の暗殺事件などがあり、イスラム勢力と世俗派との対立が激化した。民主化プロセスが危ぶまれたが、労働組合、産業同盟、人権団体、法曹団体の4者による「国民対話カルテット」が仲介し、宗教や立場を乗り越えて、地道な対話を広げ、紛争を防ぐ活動をしてきた。そして、2014年に新憲法制定にこぎつけた。それがノーベル平和賞に評価された訳である。しかし、チュニジアは今も問題は山積している。革命前よりも経済は悪化し、20%近い失業率と貧富の格差があり、過激化思想は根深く浸透している。シリアで暴虐を尽くしているIS（イスラム国）への参加者は3,000人を超えていると言われている。今年の3月に、首都チュニスの博物館を襲撃したテロ、6月には、リゾート都市のホテルでの襲撃テロが起こっている。

ノーベル賞選考委員会のフィーベ委員長は「チュニジアは基本的人権の尊重を求める活発な市民社会に支えられ、民主化の移行を遂げてきた」と評価し、授賞で「中東や北アフリカをはじめとした各地で、世俗勢力とイスラム勢力が平和と民主主義に取り組むことが促進されるのを望む」と述べている。混迷を深めるイスラム諸国において、民主化を成功させたチュニジアを後押しし、イスラム諸国に民主化を広げたい意図が伝わってくる。国民の中で「ベンアリ時代は壁に耳があったんだ。批判なんてできなかった」「今は政治的な主張でも何でも言える」という声が聞かれるという。

「アラブの春」はイスラム諸国に少なからず訪れたが、実りは少ない。リビアのカダフィー独裁政権は崩壊したが、イスラム勢力と世俗勢力が争い、それぞれの政府や議会を設け、異常事態が続いている。エジプトはムバラク政権が退陣した後、イスラム主義政権を軍のクーデターで倒し、テロ活動は収まりそうにない。シリアは悲惨である。アサド強権政権に対し、反政府軍が打倒を目指したが、アルカイダ、ISが参入してきた。そして米国、ソ連も加わり、收拾がつかない状態になっている。大国の軍隊が介入して、解決するとは思えない。難民になった人々、難民にもなれず、戦禍で亡くなり、死の恐怖に怯えている人々の苦難は計り知れない。唯一「アラブの春」を達成しようとしているチュニジアはジャスミンの花を香しく、きれいに咲かせてほしいと思う。

ノーベル平和賞に関して、様々な議論があり、評価基準に対し異論もある。黒人差別を訴えたマーティン・ルーサー・キング牧師、貧しい人々を献身的に支えたマザー・テレサ、女子教育の権利を訴えたパキスタンの少女マララ・ユフズサイの受賞には異論はない。

佐藤栄作元首相は「非核三原則」を提唱し認められ、受賞したが、米国と「核の密約」を交わしていた。米国のオバマ大統領も、プラハで「核なき世界」と大見得の演説をし、期待が寄せられ受賞したが、臨界前核実験を止めることはない。政治家への授賞は問題が多い。選考委員会でも、批判やもめ事が起こり、訴訟問題にまでなっていると聞く。

日本の「憲法九条を守る会」「日本原水爆被害者団体協議会」がノーベル平和賞にノミネートされている。いつの日かの受賞を期待している。